ばってん

事務長会報第24号
平成20年10月１日
長崎県公立学校事務長会
長崎西高等学校内
〒852-8014 長崎市竹の久保町12-9
電話 095-861-5106

ホテルセントヒル長崎
TEL 095-822-2251
長崎市筑後町４番10号

“まず、取りかかる”

副会長　小　林　利　光
（佐世保北高等学校・佐世保北中学校）

あと半年で卒業である。

“ばってん”のハードルを越えないと卒業証書がもらえない。電話を受けて以来、何を書こうかと考えたが、ハードルが高い。

・取りかかる

やらなければいけないのは分かっているけれど、どうしてもやる気が出ない。ついつい後回しにしてしまう。そして切羽詰まってようやく取りかかると、案の定、もう少し早く始めていればよかったと悔やむ。そんなことが、よくある。まさに今の私の状況だ。

仕事でも、気が進まない、苦手だといって避けて通れないことがある。そうしたことにぎりぎりになって取り組んだのでは、焦りが生じたり、間に合わせのための雑なやり方になって、思うような成果があがらない。

どのみちやらなければならないことなら、早く取りかかった方がよい。ある程度の形がつけば、手直しが必要なところも見えてくる。それを一つひとつ直してゆけばいい。そのようにして自分なりにやりとげられれば、満足感、達成感も得られ、何事にも余裕をもって取り組めるに違いない。

・意識をもつ

仕事でもスポーツでも、ただ漫然と、指示されるがまま、通り一遍に行うのと、“何のために、今これをしているのか”を理解し意識しながらやるのとでは、結果がまったく異なってくる。やっていることの意味が分かれば面白くなり、やる気も高まる。そしてその意味を意識して行うと、仕事の質も向上し、おのずと成果につながっていく。

すべてのことを、なぜ、何のためにやるのかと、いちいち考えてはいられないとか、何にも考えずに、マニュアル通りにやっているほうが楽だという考えもあろうがそれではいつまでたってもやっつけ仕事の域を出ないだろう。

何事にあたっても、その意味を知り、意識して行うことにより、期待される成果を生み出すことになるのではないか。

・見守る

昨年度からの三年間で４０名近い団塊世代の事務長が退職することになる。事務長の半数以上が若返ることになり、事務長会のなお一層の活性化が期待されるところだ。

一方、事務室においては事務職員定数の見直しや合理化など避けて通れない状況であり、今後事務室を運営していくうえで事務室機能の充実は不可欠だ。なかでも重要なのは人をどう育てていくかだろうと思う。

指導をする立場になると、相手がなかなか上達しなかったり要領を得ないと、ともすると苛立ち、頭を悩ます。そして、こまごまと口を出し、手を貸してしまうことが少なくない。

それは、家庭での子育ても同様。子どもが思うようにできないと、ついうるさく注意し、世話を焼く。

だが、人には、それぞれ持ち味があり、成長の仕方もそのスピードもみな違う。着実に少しずつ力をつけていく者もいれば、あるとき急に伸びる者もいる。いずれにせよ、懸命に取り組んでいれば、遅かれ早かれ必ず伸びていく。

もちろん適切な指導や助言は必要だけど、手のかけすぎは本人が本来持っている力を奪い、かえって成長を妨げることになりはしないか。

指導者（事務長、上司）として、辛抱づよく、気長に見守ることも大事なことの一つではないだろうか。

自分自身が、こうあれば良かったと近ごろ感じていることを、自戒を込め書いてみた。以前読んだ本に「ものを書くことは、恥をかくことなのだ」とあり、私にとっては、まさにそのとおりのようだ。

「事務長　まだ０歳」
～新任事務長として～

上五島高等学校　濵　田　邦　博

吉田事務長会会長さんは、事務長としての基本的資質について、「ばってん」第２２号に、「これから誕生する事務長さん方へ」と題し、(1)健康であること。(2)基礎・基本を習得すること。(3)応用力を兼ね備えること。(4)人間性を養うこと。の４点を具備することが大事であると説かれています。

今年４月に誕生し、まだ０歳児の私は、これらを具備することを目標に鍛錬する日々を過ごしています。

ここ上五島高校は、私が新規採用になって１０校目の高校です。これまでの９校２８年間に同じ学校でお世話になった事務長さんは、初任校の洲加本事務長さん始め１５名にもなります。また、学校は違っても、事務職員協会や地区の研修会等を通じ、指導していただいた事務長さん方は、数に限りがありません。

今まで担当者としても責任を持って押印していたのに、事務長となって、事務長の枠に印鑑を押す作業は「責任」の重みに、つい、手が止まります。たくさんの先輩に基礎から応用まで教えていただき、学校事務は何でも経験してきたつもりだったのに、事務長になるとこんなにも分からなかったり、判断に迷ったりするのかとつくづく考えさせられる数ヶ月です。こんな時は、あの先輩事務長だったらどう判断されるだろうと思い返しながら、なんとか懸案事項を処理しています。

最近は「モンスター〇〇」と言う言葉が流行りましたが、モンスターが生まれる一因には、学校側の一番最初の対応も要因としてあるのではないかと考えると、事務室は、窓口や電話の応対に学校側の一員として当事者意識が反映されなければなりません。ここでも、基礎と応用力の試される時です。

新任事務長として誕生して、這い這いしている間もなく、周りの人たちに支えられ、やっと掴まり立ちしたら、すぐに歩き出さなければなりません。来年３月には、３年生は卒業してしまい、教育現場は待ってはくれません。

長崎では、満１歳の誕生日の「餅踏み」で、「そろばん」と「かなづち」と「筆」などの用意した中から子供が何をつかむのかで将来を占いますが、１年経って事務長としての基本的資質の何かをつかめるのでしょうか。

今年はオリンピックの年でした。各競技のトップレベルの試合そのものも楽しめますが、若い選手達が話す試合後のインタビューにも感動します。今年はみんな「感謝」の言葉が多かったように思います。自分一人では達成できないことを噛みしめながら、周りのスタッフや応援している人に感謝の言葉を述べている選手達のように、いまこの学校から社会へと巣立っていく子供たちにも、支えてくれる両親や周りの人たちに素直に「感謝」できる想いを高校三年間でたくさん蓄えて欲しいと思いました。

私も、「ばってんの原稿を書くように」と断れない雰囲気で、電話一本くださった先輩に感謝することにします。

感謝！

ウチのここがすばらしい

『お城と古い校舎と生徒』

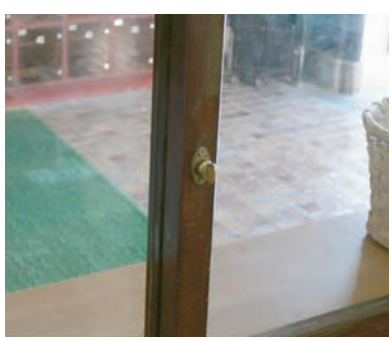
島原商業高等学校　山　崎　直　之

お堀端の見事に咲いた桜の並木を抜け、島原商業高校に赴任して、早くも３年目となりました。

事務室の席から右斜めに目を移すと、島原城の天守閣が目に入ります。校門を出ると桜並木と島原城です。

夜、校門前の堀端を覗くと、蛍の点滅を目にしました。子供と一緒に世知原少年自然の家で見た時以来の蛍でした。また、裏門からすぐに武家屋敷通りとなっています。先日は吉永小百合と竹中直人主演の映画ロケがありました。季節と歴史を感じる素晴らしい環境の中に、島原商業高校はあります。

以前の島原高等女学校の校舎を昭和３１年から島原商業高校が使用しています。校舎は７０年以上の歴史があり、ずいぶんと趣があります。廊下のあちこちには身だしなみを整えるための女学校時代の大きな鏡があります。床は７０年以上前の板張りで、掃除の時間には、生徒はバケツの水を絞り、雑巾がけに励んでいます。



さらに、事務室の受付などは、昔のままのねじ式真鍮のクルクル回す鍵です。昔懐かしい校舎が、我が島原商業高校では現存しています。いまどきこういう校舎があるんだと感動しました。時間がゆっくりと流れる雰囲気です。(但し、事務室は人数が少なくて、実に忙しい。)

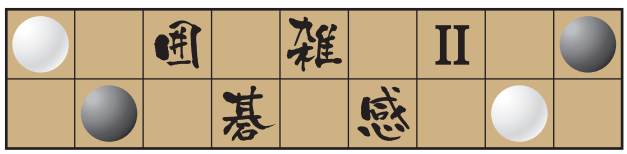
生徒の挨拶は素晴らしいものです。本当にこんな高校生がまだ日本にいたのかと思うくらいです。御辞儀の角度がいい。挨拶がいい。平成１８年度に行われた創立５０周年記念式典での生徒が一斉にした御辞儀は心がこもった見事なものでした。この時に初めて御辞儀の音を聞きました。多くの人間が一堂で一斉に御辞儀をすると、「サー」といういい音が出るんです。御辞儀のタイミングや角度が見事に揃っていました。参列した来賓は「何日かの練習だけではできないでしょう。日頃から、当たり前にしているんでしょう。素晴らしいものです。」とお褒めの言葉をいただきました。

礼節を重んじる本校の全生寮教育の顕れでした。

全生寮教育とは、本校でずっと続いている宿泊研修のことです。

身を処して誤らない行動の基準を集団生活の中で会得することを目的としています。新入生を対象にした宿泊研修を４泊５日で本校敷地内にある「全生寮」で行っています。３年生が後輩を厳しく指導します。１年生は声が枯れるほど鍛えられ、べそをかきながら挨拶している生徒もいます。高校生のこの時期に理屈抜きで生活の基本をたたき込まれます。新入生は苦しい中で、生涯の財産を貰っていると思います。また、この全生寮での宿泊研修を終えることにより、新入生が島商生としての自覚と誇りを持つことになります。島商生を育てる大切なものです。

以上、本校には素晴らしいものは沢山ありますが、その中で、桜並木と城を目の前にした学校環境、昔懐かしい校舎、御辞儀の角度がいい生徒を紹介しました。



島原農業高等学校　西　郷　尚　明

「ばってん」２０号に、古川事務長が「囲碁雑感」を書いておられます。

補足させていただくと、正確には昭和６３年１０月２９日と平成元年８月２７日。

第１回が小浜温泉保養センター湯島において９名の参加、２回目が島原九十九ホテルで１３名の参加で「長崎県高校事務職員親碁会」が開催されております。

確かに、椎山事務長さんが抜きん出ており、今思うと、どの位強かったのか、今対局したら勝てるようになっているだろうかと思う昨今です。（ご冥福をお祈りいたします。）

平成５年１０月より今年２０年３月までの約１５年間、「長崎囲碁研究会」という集まりに参加してきました。

どのような集まりかと申しますと、参加者は約３５名、県内のアマ棋戦に参戦する長崎市及び周辺の碁の強い人達の集まりといえます。

毎週木曜日が例会で、２ヶ月を周期に対戦相手が決められております。

勝敗で持ち点が上下する棋戦と、所属するリーグでの棋戦、この２つの棋戦を交互に２ヶ月の単位で打っていく仕組みになっています。

この会に参加している人達は、退職して、碁を打つのが楽しみで入ってくる人も多いのですが、「碁が強くなりたい」という思いは、皆さん同じものを持っています。

年齢・職業は一切関係なく、とにかく強い人が尊敬されるという、とことん勝負にこだわる人達の集まりなのです。

私の１５年間の通算成績は２４８勝２７２敗、持ち点では２０位以内に入ることもなく、リーグ戦もたまにＢリーグに上がってはすぐに落ちるという繰り返しでした。

それでも、毎週木曜日６時３０分というのが、生活の１番目にあったのは間違いなかったようです。

ＮＨＫの大河ドラマ「篤姫」で、碁盤をはさむ場面が映し出されます。碁を打つ人達は、本当に嬉しい気分になっているものと思います。

「碁」の効用を論じるつもりはありませんが、「相手が何を考えているのか」を感じ取る。「冷静に物事を判断する」といった習慣を身につける。

囲碁を打つことによって会得できるのであれば、最高の趣味といえるのではないでしょうか。

先日、退職校長会の碁会にも初めて参加させてもらいました。

古川事務長さんは、「現段階では指導を受けるとしか言えない」と書いておられますが、そろそろ対抗戦を計画してもいかがなものでしょうか。「それじゃあ私も」という参加者を募りたいものです。

海を渡る猫

富江高等学校　稲　垣　洋　一

水を怖がるはずの猫が、何度も五島灘を往復しています。名前は「ゆみ吉」三歳です。前任の大崎高校の前の海に捨てられ、弓道場付近で拾われたので、最初は「ユーミン」と言いました。それというのも誰もがメスと信じていたのです。ところが「引き取り手が見つかるまで」預かったつもりの私が、ずるずると飼い始めてしばらくすると、何とオスである証拠が明白になったので改名しました。

この「ゆみ吉」は私が富江から時津の自宅に帰るたびに、バスケットに入ったままジェットフォイルとバスで旅をします。室内飼いのため外の世界が恐ろしいのか、家に着くまで数時間一度も鳴かず静かにしている「お利口さん」です。

大崎でも富江でも私は公舎に住んでいるのに、猫を飼って良いのかという御意見もあるでしょうが、極力部屋を荒らさないように常に柱につないでいますので、どうか単身赴任者のわがままとお許し下さい。

そういう環境に加えて餌は食べ放題のため、当然太りすぎてバスケットが肩に食い込みますが、ペットを飼ったからには苦労は覚悟の上です。人と猫の違いはあっても、これは「子育て」と同じではないでしょうか。まだ子猫の時に女房が思わず「お母さんですよ」と言ったので「猫を産んだのか」と笑ったのですが、いつの間にか私も猫に「お父ちゃん」と話しかけるようになってしまいました。

果たして「ゆみ吉」にとって、今の生活が幸せなのかどうかはわかりません。自由に走り回りたいのかも知れません。しかし少なくとも、私と猫が今共にそれなりに生きていることだけは確かです。そして私にとって「猫と共に生きる」ことは、この富江の学校や地域の中で「人と共に生きる」ことと同じです。

本校の閉校まで２年半です。「終わり良ければ全て良し」という言葉もありますが、どうすればいい幕引きができるのか悩む日々です。本校の周年誌（昭和五十一年の十周年から平成十八年の四十周年まで四冊）を読んでいると、学校のために注がれたエネルギーが生半可なものではなかったことに驚きます。あらゆる歴史と同じように、たとえ建物が無くなっても、これらの先人の思いは永遠に残ることでしょう。　四月に「ゆみ吉」と赴任し（ちなみに大崎高ではミドリガメと一緒でした）、富江の暮らしにも慣れました。これから猫も人も大切にしながら、心静かに閉校を迎えたいと思っています。

随想

存在価値ある商業教育へ

佐世保商業高等学校長　中　野　　勝

昨今、交通・情報機能の急速な進展・普及による経済のサービス化・グローバル化に伴い、我が国の産業・経済構造も変化を余儀なくされています。併せて、格差社会と呼ばれる状況や、これまで我が国の経済的発展の原動力であった団塊世代の豊かな知恵と技術力が産業・経済社会から減退している状況があります。

また、少子化及び教育の現状に鑑み中央教育審議会・教育再生会議を中心に様々な教育論議が頻繁になされ、教育改革の波が全国に押し寄せています。本県においても数年前より教育改革が始まり、学級数の減や専門教育を中心とした統廃合及び総合学科などへの学科改編が進捗しています。とりわけ商業教育が置かれている状況は他科に比べ厳しいものがあります。

毎年、春に行われる全国商業高等学校長会に参加しています。会場の九段会館は数年前まで満席状態でしたが、年々空席が増えるようになってきています。全国的な少子化に伴う教育改革の流れでもあるでしょうが、空席の数だけ商業教育の灯りがまたひとつ全国のどこかで消えていることに残念な思いをしているのは私ひとりではないと思っています。

我が国における商業教育の始まりは明治になってからです。明治初期の教育法令「学制」により商業学校についての規定がなされ商業教育が誕生していますが、明治政府の貧弱な商業教育施策に併せ、江戸時代から商人には「読み、書き、算盤」の心得があれば充分、「商人には学問はいらぬ」との根強い風潮があり明治初期の商業教育及び商業学校の普及を妨げていました。しかし、今日まで商業教育が、我が国の経済社会の原動力となり経済発展に大きな貢献をしてきたことに疑う余地はありません。いつの時代も、教育と経済は密接な関係にあり連動しています。特に、商業教育にはそれが顕著に現れ、時代に翻弄され続けてきました。それ故、他の教育内容と比較して課題も悩みも多いと考えています。ある商業科の先達が数年前、今の厳しい専門教育、特に商業教育の状況を予測するかのごとく「科学技術が急速な進歩を始めた昭和４０年以降の専門教育は、自らの存在を賭けた変化であった。もしかしたら消滅するかも知れないという危機感を、普通科教育は持ったことはないが、専門教育はずっと抱き続けてきた。……専門教育が時代の要請に呼応することは、いつの時代も避けて通れない課題である。とりわけ商業教育は経済社会に密接に関わった教科であるとともに、工業・農業教育に比べ、技能・技術的側面のみでは専門性が薄い教科である。それ故いかに時代に対応し専門性を深めるかということは常に重要な課題であった。」とある会誌に記されていました。まさに今の商業教育の課題を我々に明確に教示していると思っています。

このような中、高校における次期学習指導要領の内容が秋頃には告示されると聞いています。商業教育においても、経済のサービス化・グローバル化、情報機能の急速な進展、知識基盤社会の到来に対応し、ビジネスの諸活動を主体的・合理的に行う実践力、遵法精神や起業家精神などを身に付けた創造性豊かな人材を育成するよう教育内容が改善されようとしています。商業教育に携わる者には、次期学習指導要領の主旨を理解し、経済・企業の動向など商業教育の置かれている現況を充分に把握・分析するとともに、教え込む教育だけでなく、「考える」・「発見する」・「表現する」・「創り出す」・「継続する」教育など「教えて考えさせる教育」の重要性を認識するとともに、これらを実践できる指導力を養うことが求められていると考えています。

また、教育には「やるべきこと」・「やるべきとき」・「やるべきところ」を誤らないようにしなければならない責任があります。すべての校種に共通することですが、特に商業教育では、地域・経済社会で貢献できる人材の育成を念頭におき，「進路保障」を中心に据え、生徒・保護者の夢である進路の具現化を図ることが大切なことであると思っています。商業を学ぶ生徒達に進路保障を確かなものにすることにより、それぞれの地域において中学生やその保護者から選ばれる教育となり、それがやがて地域に存在価値のある商業教育へと繋がっていくことを願っています。

編集後記

あんなに暑かった今年の夏も、いつの間にかすっかり秋の気配、雑草だらけの公舎の庭を眺めながら、「どがんかせんばいかん」と心の内で思いながらも、また一方では「まだよかさ、せっかく雑草にも負けずに朝顔がいっぱい綺麗に咲いてるし、かえって地球温暖化の防止にもなってるはずだし･･･」と、自分自身に言い訳しながら草刈りを一日延ばしにしている８月の終わり、どんなに言い訳しても、「ばってん」の編集作業はこれ以上先延ばしにできない時期に来た。今年の夏休みは、物品と学校諸費の事務実態調査で慌ただしく過ぎて行き、気がついたら９月がもう目の前、夏休みの宿題を始業式前日にねじりはちまきでやっているようなものだ。

編集作業に携わるのは今回で三回目。毎回、どなたに、どんな原稿をお願いしようか？と悩む。そしてそれ以上に、原稿依頼の電話で、どういう風に切り出そうかとまた悩む。(もっとも、依頼の電話を受けられた方もご迷惑でしょうが･･)新米の私としては、諸先輩方に「忙しい」、「文才がないから」と断られると、それでも、是非書いてくださいとは言い難く、早々に引き下がらざるを得ない。いきおい、人脈に頼ることとなるが、私の周りには、書くより話すのが得意？の方が多いらしく、いつも楽しく興味深い話をしてくださる方も、なかなか原稿を引き受けてはくださらない。

幸いにも、今回の「ばってん」では、九州地区商業校長会前の忙しい時期に中野校長先生には快く執筆を引き受けていただき、ほんとにあっという間に原稿をいただいた。ありがとうございました。そして、また、事務実態調査を控えた忙しい中、快諾いただいた事務長会会員の皆様方、本当にありがとうございました。　（Ｎａｏ）